

いのちをおさめる

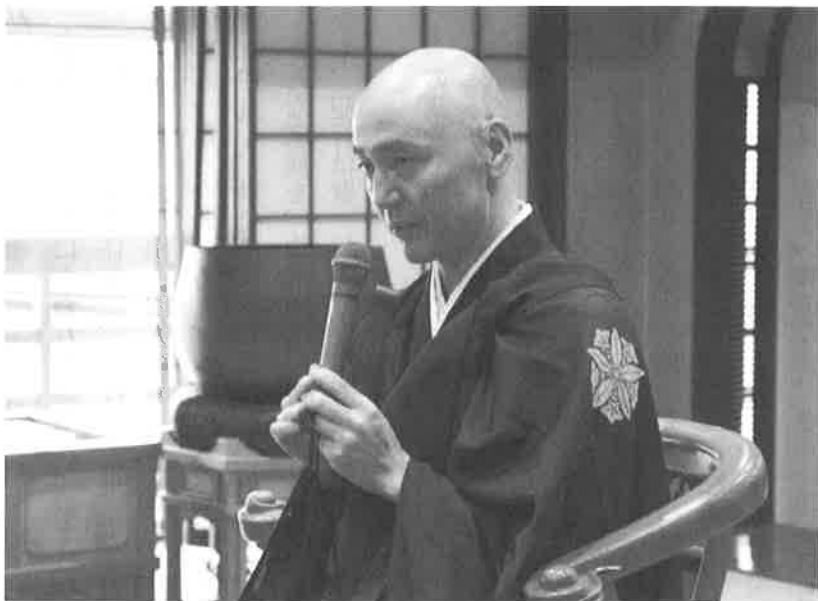
長泉寺住職 水庭 浩章

「人生は、長短に関わらずパーフェクトである。人生は長い短いにかかわらず完全である」この言葉は、入江杏さんという方が、講演会の中でおっしゃった、私にとりまして、とても印象に残ったお言葉です。

昨年もお話しいたしましたが、私は今、東京都港区にありますが大本山永平寺別院長谷寺という修行道場に勤めています。福井県にあります大本山永平寺の東京別院として、現在三十名の修行僧と、十三名の指導役である役寮と、併せ

て四十三名で日日修行生活をおくっています。私は、そのお寺で人権学習の担当を仰せつかっております。毎年複数の修行道場が一か所のお寺に集まり、一泊二日の日程で人権学習会を行っているのですが、昨年は、私どものお寺が当番でした。

当番に当たったお寺では、学習カリキュラムの作成や資料作り、部屋の準備等を行います。中でも、私が悩んだのが、講師の選任でした。特別、当てもなかったのに、インターネットで



調べるしかないと思い「人権学習の講師」と打ち込んで検索していた時に、入江さんのことを知りました。

今から十六年前、西暦二千年の大晦日、皆様どのようなことがあったか覚えていらつしやいますでしょうか。

世間を震撼させた大事件、一家四人が尊い命を奪われた、所謂「世田谷事件」。入江さんは、被害にあわれた奥様の実のお姉さんです。

偶々インターネット上に、入江さんが以前に講演された様子が掲載されておりました。その講演のタイトルが「突然の別れ・喪失と悲しみからの再生へ」犯罪被害やその家族の人権を考える」というもので、私たち僧侶が決して目をそらすことが出来ない重要なお話をしていただけと考え、講師の依頼をしたところ、私でお役に立てるのであればと快くお引き受けいた

できました。

事件当時、被害にあわれた妹さん一家とは壁一枚隔てた二世帯住宅に、入江さんは、夫と息子さん、実のお母様と四人で暮らしていました。妹さん一家と合わせると、八人の大家族で、とても仲良く、幸せに暮らしておりました。

そんな家族を、突然四人も失ってしまう。しかも、犯行は壁一枚隔てた隣で起こっていた。

その講義でお話しくださいました事を少しご紹介いたします。

理不尽な暴力により、一瞬にして大切な家族四人を失った入江さん。あまりの突然の別れにより、耐え難い悲しみ、苦しみに襲われました。犯人に対する怒り、きつと助けを求めたに違いない妹家族四人を救えなかった自責の念。

絶望のどん底に突き落とされただけでなく、周囲の偏見、心ない報道など、さらに追い打ち

をかけるようなことが続く中、死んでしまったと思う時期もあったそうです。

事件後、入江さんにとってなかなか受け入れることのできない言葉があったそうです。

それは、「このような最期を遂げて、無念だっただろう」とか、「小さなお子様のことを思うとかかわいそうでならない」とか、ありふれたお悔やみの言葉ですが、入江さんの心には全く響きませんでした。

「四人の人生はそんなに無念だったのだろうか。そんなに可哀想な人生だったのだろうか……」

事件から六年後、入江さんに転機が訪れます。事件後、さまざまな出会いの中で知り合った出版関係の方から絵本の創作を依頼されました。

「四人は、ただ理不尽な事件に巻き込まれた

可哀想な一家ではない。それぞれに輝かしい人生を歩んでいたのだ。そのことを、私が四人に代わって伝えていこう」

その様な思いから、入江さんは絵本を創作し、また、絵本の読み聞かせの活動を始めました。そして、現在は、自らの体験を活かし、犯罪や災害で大切な人を失った方々への心のケア「グリーンケア」に力を注がれています。

入江さんのお話を伺い感じたことをとても語り尽くせませんが、ひとつ心に残った言葉を紹介します。

「存在しないものの存在を想像する力、あるいは、あるものが存在しているときに、それが存在しなくなるかもしれないと感じられる力」という言葉です。

この世は無常であり、常に移り変わっていく。目に見える世界だけがすべてではない。それが、この世の真実のありようです。

皆様の中にも、目には見えないけれども、たくさんのいのちをそれぞれがおさめられている。意識する、しないに関わらず、納めている。そのたくさんのいのちが、自分の一部となり、知らず知らずのうちに支えてくれている。

皆様、それぞれの人生の中で、そのようなことを感じたことはございませんか？その感性を大切にしていくことが、とても大事なことです。

私たち僧侶が勤めている葬儀も同様です。亡き方を、ただ不確かな異次元の世界にお送りすることが葬儀ではありません。そんな無責任なことを私たちはしていません。

ご遺族の皆様と一緒に、亡き方の御いのちを僧侶自らの中に納めていく。

この両の眼で見える世界では、亡くなった方のいのちは尽きてしまっただけで、目に見える世界がすべてではない。

いつでもここ（胸の中）にいる。そのお姿は見えないけれども、お声は聞こえないけれども、いつでも私の中にいて、時には厳しく、時には慈悲のまなざしをもって見てくださっている。ですから、私の行いが、私がいのちを納めさせていたでいる人々を善くもするし悪くもする。その覚悟をもって、いつでも勤めています。

今から十六年前、私は二十七歳で山梨県甲府市の長泉寺というお寺の住職に就任いたしました。就任当初、お葬儀を勤める時にはいつもビクビクしながら勤めていました。口には出しませんでした。自信を持っていませんでした。しかし、今は違います。今なら堂々と、自信をもって言えます。私が勤めれば大丈夫だと。

何故なら、葬儀の時間だけがすべてではない。

その方の御いのちを自らに納め、ずーっと一緒に生きていく。私が死ぬまで、いや、私が死んでも弟子がいればその弟子に至るまで、いつでも生き続けている。それが、いのちの相続です。亡き方のいのちの灯をそこで消してはならないのです。

その覚悟が決まった時には、私が自信なく葬儀をお勤めさせていただいた亡き方々も迷わすことは決してありません。私の中に納めさせていたでいるのですから。

いつでも、どこでも、胸を張って堂々と、「私が勤めてよかったでしょ」と言える和尚であり続けるために、日々精進していく。また、たくさんのお納めした御いのちが、私をそのように動かしてくれる。今の私があるのは、間違いくそのお蔭です。

私事で恐縮ですが、昨年は一月に師匠を亡く

し、年末には祖母を亡くし、葬儀で始まり葬儀で終わる一年でした。

私が今つとめている永平寺東京別院に就任したのが昨年一月十日でしたが、師匠が亡くなったのは一月六日、長谷寺就任四日前のことでした。そんな事情から、慌ただしく仮通夜、茶毘式だけをすませて、すぐに東京に向かいました。

本葬まで、約三週間あったのですが、打ち合わせ以外、殆ど帰ることはありませんでした。お盆の期間中も、新盆にも関わらず、一度も師匠のお参りをしませんでした。

祖母が亡くなったのは、暮れの押し迫った二月二十四日、悲しむ間もなく大慌てで日程調整をして、十二月二十六日、二十七日にお通夜・お葬儀を済ませ、二十八日には東京に戻り、正月準備をしました。

年末年始は、正月行事の為に東京と山梨を行

ったり来たりと大忙し。とても祖母のことを思い返して悲しむ暇ありませんでした。

確かに、師匠と祖母の他界は大きな悲しみや寂しさがありますが、そのことを忘れるくらい忙しい日々を送っておりまし、今現在も同じ状況です。

冷たい弟子、或いは孫のように思われるかもしれませんが、私はこれでいいと思っています。私が和尚として成長して、その結果、私の行いが世のため人のためになれば、そのことこそが、師匠や祖母に対する一番の恩返しになると思っています。

また、昨年は、一年前にもお話し致しましたが、私の連れ合いの大病もありました。当初の検査で悪性と言われたときには、とてつもない大きな不安を抱きました。恐らく妻は、気丈にふるまってはいましたが、私以上に不安を抱え

ていたことでしょうか。

本来なら、夫である私が傍にいてやりたいという思いはありました。妻も恐らく本心ではそう思っていたと思います。しかし、私たちは、通院とか検査、手術の時には傍にいましたが、一緒にいる時間は最小限にして、私は東京で修行僧と向き合い、妻は甲府で闘病しながらお寺を守るという選択を致しました。

その代り、いつでも真剣に修行僧と接し、お互いに成長をする。「衆生済度」人々の救済という大誓願をお互いに実現できるように和尙になる。そのことが世の為人の為となり、間接的に妻の為になると考え、二人で話し合い、極力それまで通りの日常を保つように努めました。

福井県にあります大本山永平寺を開かれた道元禪師様には、お師匠様が二人いらっしやいます。一人は当時の南宋、現在の中国浙江省、天

童山景德寺の住職を務めていた如浄禪師という方です。

比叡山で僧侶としてのキャリアをスタートさせた道元禪師でしたが、ある大きな疑問を抱きます。

それは、当時日本に伝えられた仏教の中に、「人間は本来皆、仏を備えている」、という言葉があるのですが、それならば何故、過去の高僧たちが厳しい修行を修めてこられたのか、というものです。その疑問を解決するために、博多より船に乗り当時の南宋、今の中国に向かい、二年の歳月をかけて漸く求めていた師匠、天童如浄禪師と出会い、それから二年間、如浄禪師のもとで修行を修められました。

如浄禪師の教えとは、師匠から弟子へと余すことなく受け継がれる、云わば「仏のいのちの

相続」です。当時の日本仏教は、どちらかと言えば学問的に教えを学ぶということがほとんどで、師匠と共に生活をし、純粹に師匠のいのちをそっくりそのまま相続するということがありませんでした。

先ほど申し上げた私たちの葬儀に対する姿勢も、この道元禅師のお示しにある通りに行じております。

その「仏のいのちの相続」をすることにより、本来自ら備えている仏を具現するのです。

さて、道元禅師のもう一人のお師匠様は、道元禅師と同じく疑念を抱き、共に南宋にわたった明全禅師というお方です。

比叡山にいても自らの疑念を晴らすことができないうと悟った道元禅師は、比叡山を下り、当時南宋に渡り、禅の教えを学んできた京都、臨濟宗建仁寺の栄西禅師を訪ねます。しかし、栄

西禅師は高齢で、そのお弟子の明全禅師について禅の家風を学ぶようになりました。

明全禅師は、道元禅師と共に南宋に渡ることを志し、いよいよその日が迫ってきたある日、建仁寺にいる修行僧たちにこんなことを問います。

「私の育ての親であり師匠でもある、比叡山の明融阿闍梨が大病を患い、余命いくばくもない状態である。師匠は『せめてお前ひとりだけは儂を看取ってから、宋に渡る希望をかなえてくれないか』と言っている。私は幼少のとき、両親の家を出て以来、この師匠に育てられ、お蔭で今これまでに成長できた。

この師匠の御恩でないものはない。しかし、今こうして身命を顧みずに南宋に渡って真実の教えを求めるのも、大きな慈悲心からであり、人々



の為になろうとしてである。師匠の仰せに背いて南宋に出かける道理はどうかであろうか。皆さん方の意見をお聞きしたい」と訊ねます。

建仁寺の修行僧の多くは、今年の南宋行は中止して、来年その目的をはたすように勧めました。そうすれば、お師匠様の仰せにも背かず、一年遅れてしまいが目的を果たすことが出来るというのが大半の考えでした。

明全禪師は、皆の意見を聞いてこういわれました。

「皆さんの意見は、いずれも今回の南宋に行くことはやめた方がいいとの話を賜りました。しかし、私の考えは違う。此の度行くのをやめて、看病をしたところで命が延びるわけでもない。仮にそのようなことをしたら、師匠は間違つて弟子の志を妨げることになろう。反対に、私が南宋にいつて志を遂げたのならば、師匠の

情には背いても、多くの人々を救うことができよう。それこそが師匠に対する一番の恩返しである。もしも、志を遂げる前に私が命を落とすようなことがあっても、教えをもとめる志をもって死ぬのであるから、将来に志を遂げることでもできよう。これによって、私の南宋行きの決心は揺るぎないものになった」

そのように云われ、明全禪師は道元禪師と共に、南宋に向かわれました。

実際、明全禪師は南宋にて病を患い、命を落とすことになりましたが、その志は道元禪師に受け継がれ、道元禪師は天童如浄禪師のもとで、おさとりを開かれました。

その道元禪師の中には、明全禪師の御いのが余すことなく相続されています。道元禪師が志を遂げられ、自らの疑念を晴らした時には、明全禪師も同じように志を遂げ、明全禪師の師

匠、明融阿闍梨も同じく志を遂げられたことになります。いのちを納め、生かしていくということはそういうことなのです。

このような過去の偉人の生き様から見ても、私と妻の出した答えが間違いいはないと思えますし、また、師匠や祖母の為にも、私が修行僧と真剣に向き合い、自分自身を成長させていくことが何よりも供養になると確信しております。私の行いが、師匠や祖母、また、ご縁を頂いた、いのちを納めさせていただいた方々を善くもするし悪くもすると肝に銘じ、日々修行に励んでおります。そんな姿を、病気を患った妻も応援してくれています。

さて、私たちの修行では食事に重きを置いています。なぜなら、私たち人間が生きていくためには、食事を頂かなくてはならないからです。

その食べ物はいのちそのものです。そのいのちを、厳しい言い方をすれば殺生して、私たちは自らのいのちを繋いでいます。その食事をいただけるだけの行いを日常しているのか、感謝の気持ちで頂いているのかどうか。お肉に限らず、お米やお野菜も生きていたものです。

そのいのちを頂くということは、一人にひとつのいのちではなく、数えきれないほどのいのちがひとりひとりにはある。それは、食事として頂きたいのちだけでなく、意識する、しないに関わらず、ここに納めさせていただいた方々のいのちも同様です。無量のいのちを皆納めている。

その現実を目を向ければ、どの人も、とてもかけがえのない尊い存在であるということが理解できますね。

私たちの社会では、立場の違いはあります。しかし、それはあくまで立場の違いであって、そのことが人間の善し悪しをつけるものではない。人間に上下はありません。誰しもが、平等に、掛け替えのない存在である。

修行僧を見ていると、物覚えがいい者もいれば、悪い者もいます。体が丈夫なものもいれば、弱い者もいる。精神的に強い者もいれば、反対に打たれ弱い者もいる。しかし、私たちはそのようなことを基準に人間の善し悪しを決して決めません。人間に偏差値などつけられないのです。みんなかけがえのないお互いです。

そのかけがえのない人生を支えてくれているのが、目に見えるものばかりではない。目に見えない大切な亡き方々、或いは自らの中に納めたすべてのいのち、そういうものに思いを廻らせながら、感謝できる感受性をもって生きるこ

とが、人生をより豊かなものにしてくれること
でしよう。

今日、お話し致しました事は、私自身が昨年
体験し、その中で救われてきたことをお話しさ
せていただきました。今でも思い起こすと大き
な悲しみは癒えないし、大きな不安も拭うこと
はできません。しかし、これも自分に与えられ
た人生からの問いであると捉え、その問いに答
えていく毎日を送っています。

お話の最後に、更に私自身が救われた力強い
お言葉を紹介して、お話を終わらせていただ
きます。

私の大好きな、江戸時代の禅僧、天巖祖暁と
いうお方が、自らの師匠のことを想って残され
た七言絶句です。

幾たびか、打着に逢うて旧瘡班たり

往時を追憶すれば、毛骨寒し
快活は、当に痛処より得べし
即今翻つて恨む、
棒頭の寛なりしことを

祖暁和尚のお師匠様はとても厳しい方だった
のでしよう。そのお師匠様には、おそらく、坐
禅の時に使う警策という棒でしょうが、その棒
で幾たびか厳しく打たれたことがあり、その時
の傷跡は今でも斑に残っている。その時のこと
を思うと身の毛もよだつ思いで、今でも寒気を
憶える。

しかし、そこで転句。今の充実した快活な思
いは、当にその痛みから感じる事ができる。
今、翻つて恨む。何に対して恨むのか? 「棒頭
の寛なりしことを」、もつと打ってくればよ
かったのにと。なかなか言えることではない
ですよ。

お師匠様の厳しさがあって、今の自分がある。祖暁和尚は決して師匠を恨んでいるのではなく、祖暁和尚らしくひねくれているのですが、物凄くお師匠様に感謝していることがこの詩偈から窺い知ることができます。

私たちが生きていくうえで、お互い、辛いこと、悲しいこと、逃げ出したくなることもあるでしょう。人生そういうものですから。

しかし、苦しみの数々は、必ず未来への快活に繋がっている。お互いそのことを信じて、今を大切に歩んでまいりましょう。信じる者は救われる。

そして、祖暁和尚のように言ってみましょう。もつと苦しめてくれればよかったのにと。

心の底からその言葉が出るときには、心は平らかで、充実した、快活な人生を送っているは

ずです。ここに（胸に）納めている御いのちと共に。

「人生は皆、パーフェクト」です。



